

インタビュー

“基研所長湯川先生に共同利用研のあり方等を聞く”

物性研究編集部

九大工 山 田 知 司 他

湯川先生に基研を中心に共同利用研についてお聞きしました。筆記の都合上、要点のみを記します。それ故、内容についての責任は、編集部にあることを、断わっておきます。

問——基研は、共同利用研として singular な存在だという意見をお持ちになっていると聞きましたが、どういう意味で singular だと思っておられるのですか。——

答 かつては singular だと思っていなかった。基研は、共同利用研としては最初であり、全国の基礎物理学研究者が利用し、その基盤の上に立っているわけで、本来全国的な性格を持っている。1つの大学の附置という制度的限界の中で、全国的な研究所ということにふさわしいあり方を保持するように努力してきた。1つの大学に附置するという理由は、今までのところ、学問の自由あるいは研究者の自治が大学でないと十分保証されなかったということによる。京大の自治と共同利用研としての基研の自治というものには矛盾があるが、共同利用研としての性格を失わないでそれらが両立するように努力してきた。基研だけが singular になったようにみえるとしたら、それは後になってできた共同利用研との対比においてであって、共同利用研の本来のあり方から考えれば、singular とは思えない。基研には基研の個性があるというべきであろう。共同利用研に共通する性格としては、全国の研究者の基盤の上に立つということがあるはずだが、その反面、専門分野によってバラエティ、多様性があるのは当然である。例えば巨大科学だけを念頭において、巨大施設が共同利用研に必要と考えるのは、本末転倒である。どうも、どれかが正統でそれ以外は singular だという意見になりやすいが、学問の多様性に対して、共同利用研にもスペクトラムがあり、小さなものから大きなものまであってよいはずである。それぞれの分野の学問の基本的性格に根ざす特色は、大いに認められるべきである。任期制などでも、実験の場合に

は、難しいことはわかるが、原則的には望ましいことである。そうでないと停滞が生じやすいわけで、研究所の場合には、新陳代謝が学生の交代のある学部の場合より、一層、切実な問題になる。

問——基研を含めて共同利用研の存在に危機感を持っておられると聞きましたがどういう意味ですか。——

答 これには2つの理由がある。1つは、学問自体からのもので、もう1つは、大学のあり方あるいは、大学制度全般との関連から来るものである。研究所はできるべき理由があってできるので何年かは、当初の方針どおりで、やっていけるが、特に基研に関しては、常に開拓的であったので、むしろ、つくった当初のイメージよりずっと進んで、生物物理や天体物理などに、その領域を広げてきた。そういう新しい frontier が、どこまで広がるか。これからどこを開拓するかということは、若い世代のやるべきことである。これは共同利用研を基盤にして行なうべきであろうし、共同利用研は、新しい試みを encourage すべきであろう。ここで講座制の欠陥が問題になる。講座制が閉鎖的にはたらく時には、学問の発展が期待されにくい。大学の在り方のうち困難な点を共同利用研は補っていかなくてはならない。したがって、ここで大学制度との関連が生ずる。現在のように制度変革の時代においては、共同利用研全体が、大学からみると singular だという点だけが浮きだしてくる傾向がある。そこで、大学制度改革に際して切りすてられるのではないかというおそれが生ずる。つまり、共同利用研を内面から見た存在意義は理解されにくく、外からみての違和感だけが強調されやすい。共同利用研は外からみて大学の中での位置づけが難かしいために、批判的な意見が多くなる傾向がみられる。

<同席された松田先生と牧先生の参考意見>

共同利用研は、運営、人事に他大学の人の意見が入るわけで大学の自治と矛盾する面がでてくる。そのため京大の自治との関連は、相互尊重、相互不干渉でやってきた。そこで共同利用研に対しいろいろな批判が行なわれてきた。1つは、法理論的側面からで他大学の人の意見が運営に入ることに対する批判と、もう1つは、道徳的側面からで、大学のかさの下にいるのに責任をはたさないのはおかしいという意見である。

問——16年前に基研を作られた時の共同利用研に対する展望、理想は、どんなものでしたか。それが、この16年間にどの様に変化を受けましたか。現時点における理想の姿は。——

答 はじめは、素粒子中心に狭く考えていたが、1953年に基研ができてから、先ず物性基礎論がつけ加わり、1955年頃から、天体核とか生体物理などの研究会が開かれるようになった。できる前には、そんなに先の見通しはなかったと言える。シュレーディンガーの「生命とは何か」という本の影響もあって、生物物理的認識がだんだんとはっきりしてきたし、天体もやっているうちに進化論的な話につながっていった。日本では、なかなか境界領域あるいは違った分野にとびこむのは難かしい。1人1人の研究者は、establish されている分野でないと、研究がやりにくいところがある。共同利用研は、そういうことのできる機能を持つことが望ましい。共同利用研は、新しい領域の開拓ということも含めて、全国的な研究者の生長に貢献すべきで、研究所それ自体の拡大が目的ではない。このような姿勢をもつことが、1つの理想の姿といえる。ところが、ここ数年来、特に若い研究者が急に増えてきたために基研の機能を発揮することが難かしくなってきた。例えば、基研ができた当時、素粒子論の研究者は、100人位であったのが、現在では、500人位にもなっている。そのため研究会なども大きくなって議論がしにくくなっている。しかし、基研を大きくすることが良いかどうか、まだよくわからない。大きくなると細分化、専門化し弊害もでてくるだろう。また専門的になりすぎると、仕事がbusiness, routineになってしまう可能性があり素人的発想がつぶされてしまう。自由に学問をするという雰囲気も失われるだろう。だから適性規模ということがあるわけで、基研もせいぜい倍にする位が限度であろう。

問——前と重複する面があるかも知れませんが、制度として、基研は、一方では京大の附置研でもあるわけです。このようなある程度異なった2つの性格をもったものを運営する場合、指導原理と呼べるものがあたらおうかがいしたい。また大学の機関として基研のなすべき役割はどのようなものですか。——

答 設立当初は、「相互尊重」「相互不干渉」ということを原理としてうたうことはしなかった。プラズマ研究所ができる時、名大との間にそういう紳士

協定があったわけです。これは、原則的には、正しいと思うが、実際上は、境目がはっきりしない。具体的には、大学執行機関には参加していないとか、総長選挙などにも参加しないというようなことが考えられる。しかし、大学全体の運営に全然 touch しないというわけにいかない。例えば予算の問題などがある。今まで trouble は別になかったのは、一つには基礎研が小さかったからである。基研の大学に対して果す役割であるが、基研では大学院生の養成はやっていない。共同利用研としては、はえぬきの大学院学生の養成はおもしろくない。そのかわり、大学内部に対しては、スタッフは、個人の資格で、理学研究科に協力し、学部の講義もしてよい。また全国的に考えて、よその大学院の人が、短期間ではあるが、アトム型として滞在して、もっとスキッとした形になるかもしれないが、いまのところはっきりした見通しはない。

(今のお話に関連して、岩波「科学」1967年5月号に、「共同利用研究所のあり方」という湯川先生の「共同利用研究所の問題点」というシンポジウムにおける講演の筆記記録がのっております。)

共同利用研と大学

—— いわゆる「相互尊重・相互不干渉」について ——

九大理 蔵 本 由 紀

かつては、人が一定の思いをこめて語った言葉も、ひとたび人を離れると、一歩歩きをはじめ、擬似普遍性を獲得して、ついには人々の自由な思考を束縛する。わけても、ぼくたちが生きている社会、支配被支配の無数の関係が織りなす秩序の社会においては、表現された一つの理念は、しばしば支配者によって、意図的にそうした機能を与えられ、人々はわれ知らずこのことになじんで、一つの理念が、あたかも普遍的な価値を有しでもするかのような錯覚にとらわれる。そして、現代社会は、この種の思考パターンを生み出すような意識構造を、まるで人々の自由な意志の結果でもあるかのように、次々と複製して